

両漢時代の東部ユーラシア国際システムにおける 国家間相互作用

—漠南と西域をめぐる覇権争いを中心に—

何 永昌

Abstract

Since the opening of the *Hexi Corridor*, the international system of East Eurasia has formed, persisted and changed as a result of the competition for supremacy over Inner Mongolia and the Western Regions between *Han Dynasty* and *Xiongnu*. According to the relationship between *Han* and *Xiongnu*, there are four periods: the rivalry for supremacy, the peace due to *Xiongnu's* submission to Han, the rivalry after *Xiongnu's* resistance and the decisive defeat of *Xiongnu* by *Han*, and *Han's* unipolar system. However, as *Han* became incapable of supporting the system so that it functioned, the system finally collapsed.

キーワード……漢 匈奴 西域

はじめに

紀元前 121 年、河西の戦いに勝った漢は河西回廊を奪取し、投降した匈奴の渾邪・休屠二王の領地に五つの属国を置き、その後、河西四郡の設置を通じて、匈奴によって遮断された西域への通路を開いた。これを境にして、東部ユーラシアは、農耕地域・遊牧地域・西域（オアシス地域）を包含する一つの国際システムとして最終的に成立したことになる¹⁾。英国学派によると、国際システムになる基準として、「ある国家の行動が、他の国家が行動する上で必要な要素になる」²⁾ほどの相互作用が存在している。したがって、形成された後の東部ユーラシアにおける国際システムの継続、変化及び崩壊を明らかにするためには、そこでの相互作用を通して分析を行うことが必要になる。

両漢時代の東部ユーラシア国際システムにおける国家間相互作用は、東アジア研究においては漢の対外関係史³⁾あるいは帝国形成史⁴⁾として、北アジア研究においては匈奴の対外関係史⁵⁾としてよく研究されてきた。しかし、いずれにしても、東部ユーラシアにおける国家間相互作用を一国の外交史として展開するため、システムという視角に立ち、システムの三つの地域を一つにする全体的分析が不足している。東部ユーラシア論が話題になった後、一国の外交史を超えて、国家間相互作用が注目を集めてきた。しかし、これらの研究は、秦漢より隋唐に集中したり、歴史研究を目的とするためシステムについてはあまり重視せず、二国関係に絞って研

究を展開するといった問題がある⁶⁾。結果として、両漢時代の東部ユーラシアにおける相互作用が十分明らかにはならない。最後に、近年では国際理論を利用して、秦漢時代の東部ユーラシアをテーマにする成果も現れてきた。しかし、理論的研究はシステムに十分な注意を払うが、歴史的観点が不足しているため、基本的には前漢中期の呼韓邪が称臣するまでの相互作用を分析し、その後の相互作用については変化のないものとする結論を下している⁷⁾。

要するに、先行研究では、両漢時代の東部ユーラシアにおける相互作用は特定の側面からよく研究されているが、システムという視角に立ち、そのシステムの形成から崩壊までの相互作用を歴史的に分析することが不足している。本稿は、農耕帝国としての漢と遊牧帝国としての匈奴が漠南において直接に対抗しながら、西域をめぐる覇権を争うという二つの側面から、両漢時代の東部ユーラシアにおける相互作用を明らかにする。そして、システムに影響を及ぼす大国としての漢と匈奴との関係を時代区分の基準とし、漢と匈奴との争覇による対抗の時代、匈奴の漢への称臣により始まる平和の時代、新と匈奴との決裂から漢と匈奴との争覇までの対抗の時代、及び北匈奴滅亡後の漢による単極の時代という四つの時期に分けて分析を展開する。なお本稿では漢を、時期を提示する時にのみ前漢と後漢に分け、国家として扱う時には前漢と後漢との区別を行わない。

1 漢と匈奴との争覇による対抗時代

前漢初期、漢は長い内戦のため経済力及び軍勢力を激しく消耗し、一方、異姓と同姓諸侯王が封地を中心として地域に割拠し中央と対抗する問題を解決しなければならなかった。そのため、劉邦が匈奴に白登山に包囲された後、漢は匈奴と和親約を結んで、平和関係を保っていた。一方、匈奴は西域に三回の攻略を行って、元より西域の覇者となっていた月氏を倒してパミールにまで駆逐させた後、西域に覇権を樹立した。だが、この時、匈奴が河西回廊を占領した結果として、漢は西域に対する認識が不十分なまま、西域諸国との政府間相互作用もなかった。したがって、東部ユーラシアは、匈奴の遮断によって、一つのシステムにならなかった。

武帝が即位するときに、漢は長年の休養を通じて国力を回復して躍増し、諸侯王の問題の解決のため国内の団結を確保した。一方、匈奴は和親を経て漢から絶えず夥しい貢ぎ物を受けてきたが、特に単于即位の後、しばしば漢の辺境に寇掠を行った。そのため、武帝は、和親に抵抗的な態度を示したが、朝廷には和親を支持する勢力がとて強かったため匈奴と新たな和親約を結んだ。だが、武帝は2年後、関市に貿易を行う匈奴の警戒心の薄さを利用して、関市の付近の馬邑城に匈奴を待ち伏せる作戦を展開した。この作戦は匈奴に見破られて、双方が軍事的衝突を行うことはなかった。これを境にして、「自是後、匈奴絶和親、攻當路塞、往往入盜於辺、不可勝数」⁸⁾とあるように、漢と匈奴は和親約による平和関係を絶って対抗関係に入った。

1-1 武帝期における漢匈争覇

武帝期の漢匈争覇は二つの段階に分けられ、第一段階が漠南での漢と匈奴との直接的軍事対決で、第二階段が西域と漠北に対する漢の攻勢だ。第一段階では、先に攻勢を行うのは匈奴だった。これは漢は匈奴を積極的に攻撃する経験を欠いていたため、馬邑事件の後、匈奴への進攻のために一定の過渡期が必要だったからである⁹⁾。この時、漢は防御-反撃策をとって、匈奴軍を撃退させた後で漠南に反撃した成果として、紀元前 127 年の河南の戦を通じて漠南への進出の拠点を確認した。一方、紀元前 126 年、軍臣が死んで、彼の弟が伊稚斜単于になった。これは冒頓単于以降、初回の兄弟相続であったため、軍臣の太子の単が漢に投降したことをもたらした。これから見て、匈奴は伊稚斜単于の即位による内訌のため不安定な状態になった。その後、漢は対匈奴作戦に舵を切って殲滅戦を展開し、紀元前 124 年の漠南の戦、紀元前 121 年の河西の戦及び紀元前 119 年の漠北の戦を通じて、オルドスと河西回廊を奪取し、漠南から匈奴を駆逐し、匈奴との対峙地域を内長城から漠南まで移したため、匈奴による北境への脅威が消えた。その後、漢は、漠南に屯田を設置して官吏・兵士を配置することで対匈奴作戦の第一防衛線を築き、漠南と内長城との間には投降してきた渾邪・休屠二王の領地に五つの属国を設置することで中間地帯を設け¹⁰⁾、さらに内長城では対匈奴作戦の第二防衛線を築いたように、三重の対匈奴防衛システムを築いた。そして、漢は匈奴の協力者の羌と匈奴との連携を中断させることでさらなる保険をかけた。最後に、漢は、以夷制夷をもって、匈奴に隷属していた烏桓の幾らかの部族を東北辺郡の外に移住させて、護烏桓校尉の監護の下で匈奴の動静を偵察する任務を負わせた。結果として、「以斷匈奴之左臂」¹¹⁾とあるように、この積極的防衛策を通じて¹²⁾、烏桓は匈奴の左地における協力から匈奴への牽制力を果たすまでに役割を変えた。

漠北の戦の後、匈奴は漢との戦争を回避するために漢に和親を請うた。この時、漢には、和親派が依然として存在したとはいえ、軍事的勝利を収めた結果として、「匈奴新困、宜使為外臣、朝請於辺」¹³⁾とある臣服勧告派は武帝の支持を得て朝廷の主流になった。したがって、和親が実現されることはなかった。しかし、匈奴は漢と戦うだけの実力を回復するために、軍事上での漢との接触を避けて、外交上は臣服の意思を装って漢を懐柔した。一方、漢は連年の大戦で文景時代に蓄積された資源を消耗し、また名将が死亡したため匈奴への追撃を諦めた。したがって、漢と匈奴は、目的の異なる外交活動を通じて共存状態に入った。

漢が匈奴との停戦に転じたのは漢の対外政策の重心の変更による。紀元前 112 年から紀元前 108 年までの 5 年間、漢は秦帝国から独立した地域（東北の朝鮮、東南の南越・東越、西南の東南夷）を征服し、郡県制の設置を通じて、農耕地域を帝国に統合することに成功した。一方、漢は匈奴の「右臂」と呼ばれる西域諸国に目を向けた。漢は月氏と連携して匈奴と対抗するため、張騫の第一次西域出使から得た知識及び交通情報にもとづいて、河西四郡を拠点にし、正式に西域への進出を開始した。漢の西域攻略は烏孫との連携のための張騫の第二次西域出使から始まった。烏孫は漢との距離が遠く、漢に対する情報が不足し、さらに匈奴の影響が強く、

漢と連合することに躊躇したため、張騫の第二次西域出使の目的は実現されなかった。しかし、今回の出使を通じて漢と西域諸国との外交関係が始まった。その後、漢では西域ブームが起こった。しかし、漢の使者は様々な人間が入り混じり、漢の威光を借りて奪略と窃盗などの悪事を行い、西域諸国で反感を招いた。そのため、西域諸国は食糧を供給しなかったり、匈奴と協力して使者を強奪したりして漢使を苦しめた。漢は西域諸国に権威を樹立するために、天山北・南路と漢の河西四郡と繋がる要衝に位置する姑師と楼蘭を征伐し、西域への出発点を確保した。そして、「因暴兵威以動烏孫・大宛之屬」¹⁴⁾とあるように、西域の大国は漢の軍事力にショックをうけた。その後、漢は烏孫の要請に応じて公主を昆莫に嫁して、烏孫と同盟を結んだ。烏孫との同盟関係を基礎に、漢は天山北路西部へ進み、二次の大宛征伐を通じて、「西域震懼、多遣使來貢獻」¹⁵⁾とあるように、強い戦力投射、莫大な軍事力及び西域攻略に対する決意で西域諸国を脅して屈服させた。これによって、漢は匈奴の勢力圏としての西域に突入し、武力で幾つかの西域諸国を自国の勢力圏に取り込んだ。

紀元前 115 年、兇単于が即位した時、匈奴は実力を基本的に回復し、漢の西域攻略によって利益を損ねたため、対漢政策を抜本的に変え、主力を漠北から河西回廊に移動させ漢と対峙した。兇単于は左大都尉が漢に投降し迎えられたことに乗じて、漢軍を包囲して滅ぼし、その後、左大都尉のために築いた受降城を占領しようとしたが、失敗した。その後、匈奴は漢の北と西北の辺境に寇掠を加えたが、辺境の防衛工事を破壊する他にほとんど大した成果を収めなかった。西域攻略で成功を収めた後、漢は対外政策の重心を匈奴に戻し、大宛を陥落させた李広利を総司令として、紀元前 99 年、紀元前 97 年、紀元前 90 年の三回にわたり匈奴征伐を行なった。しかし、李広利は戦敗し続けて、最後に匈奴に捕まって投降した。匈奴は勝利を収めるとすぐ漢に使者を派遣して、「南有大漢、北有強胡。胡者、天之驕子也、不為小禮以自煩。今欲與漢闔大關、取漢女為妻、歲給遺我藥酒萬石、糴米五千斛、雜繒萬匹、它如故約、則辺不相盜矣」¹⁶⁾とあるように、前漢初年の和親を復活させ、平和関係を結ぼうと提案した。だが、この時、漢は匈奴を外臣にしようと努力していたため、匈奴による和親の提案を当然として拒否した。

惨烈な失敗をうけた武帝は、紀元前 89 年に桑弘羊などが西域攻略のために輪台に屯田を設けようとした提言をきっかけに、『輪台罪己詔』を発して、対匈奴作戦の失敗を、占いとの関係、ロジスティクス問題及び匈奴の情報把握の適切性などに見出し、国家戦略を対外拡張から対内休養・軍事行動中止に転じた。これによって、漢の西域攻略が中止したが、武帝の 52 年にわたる事業の成果が烏有に帰するわけではない。もちろん、漢が西域にある作戦線を後退させた後、匈奴は速やかにそれ以前に失っていた勢力圏を回復した。一方、匈奴は、漢の三回の攻撃を撃退して強勢になっても、「漢兵深入窮追二十餘年、匈奴孕重墮殯、罷極苦之」¹⁷⁾とあるように、財政上と人力上の大きな損失を被ったり、漢の軍事力の強さに対する憂慮から完全に抜け出せなかったり、単于位をめぐる内訌が生まれたりしたことを理由として、漢に大規模な攻勢を展開させる能力がなかった。結果として、漢と匈奴の関係は、その舞台が再び戦場から外交に移

って、第二次共存状態に入った。

1-2 昭・宣帝期での漢匈争覇

昭帝末年から漢は西域攻略を再開した。紀元前 77 年、漢は質子の杆彌太子・頼丹を校尉將軍として輪台屯田策を行って、輪台と隣接する渠犂にまで拡張しようとした。一方、漢は前に匈奴の質子として派遣した楼蘭王を刺殺して、漢に亡命した楼蘭の尉屠耆を擁立して、楼蘭を鄯善に改名した。さらに、尉屠耆の請求に応じて、漢は伊循城に屯田して、都尉としての伊循官を設置した。結局、共存状態の期間に、漢は河西からパミールまでの西域国家と外交関係を維持しながら、天山南路北道を中心に西域攻略に成功した。

漢の西域攻略で危機感を感じた匈奴は漢と烏孫との同盟を解体させるため、漢公主の俘虜を目的に烏孫に攻撃を始めた。匈奴の烏孫征伐は以下の理由によると考えられる。漢は烏孫との同盟関係を基礎に天山北路の通過を確保しながら、烏孫との連携によって匈奴の天山北路での同盟網を突破する可能性がある。匈奴から見ると、自国の影響力を最も強く受けていた天山北路を失ったら、ドミノ効果が働いて、天山南路北道と南道も次第に自国の勢力圏から退いていく。漢公主が人質とは言え、漢・烏孫の同盟関係と烏孫に対する漢の不攻撃の約束を確保するための必要不可欠な存在であるため¹⁸⁾、公主を俘虜としたら漢と烏孫との同盟関係も次第に機能不全になる。烏孫を重要な同盟相手とみなすため、漢は十五万の騎兵を五名の將軍に率いさせ、常惠には烏孫の五万の騎兵を監護させて、匈奴に出征した。漢軍は大した勝利を収めなかった一方、常惠と烏孫軍は右谷蠡王庭まで進軍して、俘虜と畜産を沢山得た。その冬、匈奴が烏孫に報復するために攻撃・奪略した後、撤退時に大雪にあって一割の軍隊しか帰らなかった。この機会に乗じて、丁零は北から、烏桓は東から、烏孫は西から匈奴を攻撃した。さらに、厳しい気候のため、匈奴では食糧が不足し、三割の人民と五割の畜産が餓死した。結果として、「諸国羈屬者皆瓦解、攻盜不能理」¹⁹⁾とあるように、匈奴の勢力圏は崩壊寸前になった。

漢は匈奴の衰弱を機に、亀茲征伐と車師征伐を通じて天山南路北道と天山北路東部に勢力を浸透させ、匈奴の西域支配をおおむね崩壊させた。これに対して、匈奴は、「車師地肥美、近匈奴、使漢得之、多田積穀、必害人国、不可不爭也」²⁰⁾とあるように車師が漢の匈奴攻撃の拠点になることを恐れ、漢軍の主力の撤退を機に、車師奪還戦を始めた。4 年にわたる戦いの結果として、車師は二つの国家に分裂し、匈奴の代理人としての車師後国と漢の代理人としての車師前国が成立した。車師奪還戦を境に、漢が対外拡張策を中止し、匈奴が休養生息策に転じたため、宣帝期に西域をめぐる漢匈争覇が終わった。

2 匈奴の漢への称臣による平和時代

匈奴は、紀元前 60 年に単于継承をきっかけに起きた内訌のため、握衍胸鞞単于と呼韓邪単于による内戦から、五つの単于の闘争を経て、最終に紀元前 54 年に呼韓邪単于の東匈奴と郅支単

子の西匈奴に分裂した。

今回の単于継承による内訌が東西分裂にまで至ったのは主として三つの原因による。経済面では、気候変化による生産不良が飢餓と貧困をもたらした²¹⁾、西域勢力圏の縮小及び漢との関係の悪化による関市の停止のため経済的補充も減少された。安全保障面から見ると、匈奴に服順していた国々（例えば丁零・烏桓）が匈奴と反目し、その衰弱を利用して、匈奴に寇掠を加えた一方、漢が西域諸国と連合して匈奴に攻撃を与え続けた結果、匈奴は財政不況の時にも対外的防衛線を固めなければならなかった。政治面から見ると、匈奴では、単于継承が直系継承から傍系継承になる度に、直系勢力と傍系勢力の間に権力をめぐる争いが生まれた。握衍胸鞞単于は即位の時、前より酷い経済的窮困と安全保障上の不安という内憂外患に直面しながらも、中央集権策を用いて、貴族層から地方までの重要な官職として、異分子を自分の腹心と取り替えて、中央だけではなく地方勢力との闘争にまで及んだ。だが、握衍胸鞞単于は匈奴における地方勢力の強さと自主性及び中央に対する地方からの忠誠を錯誤した。遊牧政権には、地方勢力がまず自分の首領に忠誠を与えて、地方首領が中央に忠誠を示すことを通じて中央との結合ができた²²⁾。そして、匈奴は、部族連合を基礎に多くの非匈奴族の遊牧民を統合したことを通じて帝国を建てたため²³⁾、地方勢力を完全に圧倒することができなかった。結果として、呼韓邪、屠耆、呼揭、車犁、烏藉などの地方勢力の代表者は次第に単于として擁立された。したがって、今回の分裂は、継承による紛争だけではなく、もっと適切に言えば、中央集権と地方分権との闘争の現れであると考えられる。

2-1 呼韓邪称臣の後での漢と匈奴、西域関係

漢の朝廷では、激しい内戦を機に匈奴を消滅させるという意見が主流になったが、宣帝はこの時挙兵したら仁義がなくなり四夷の反目をもたらすという蕭望之の諫言を受け入れ、使者を遣わして漢の威信を宣揚させた。漢の態度を知った後、呼韓邪と郅支は漢に質子を送って漢との関係緩和を求めた。途方に暮れた呼韓邪は左伊秩訾王の諫言を受け入れて、漢に臣服の姿勢を示して、漢からの支援をもって郅支と対抗せんとした。呼韓邪の臣服に対して、多くの漢の大臣が匈奴を内臣の諸侯王に対する礼儀に倣って遇し、諸侯王の下に置こうと主張したが、宣帝は蕭望之の提案を受け入れて、「今匈奴單于稱北藩、朝正朔、朕之不逮、徳不能弘覆。其以客禮待之、令單于位在諸侯王上、贊謁稱臣而不名」²⁴⁾とある詔を下し、客礼として来朝してきた呼韓邪を遇して、単于を内臣たる諸侯王の上に置き、彼に臣を称させたが名を呼ばせようとはしなかった。

呼韓邪の臣服によって漢と東匈奴との関係は一体どようになったのだろうか。研究者のなかには、この時東匈奴が漢の内臣になったと主張する者もいるが²⁵⁾、史籍によると、呼韓邪が称臣した後、漢と東匈奴との間に客臣関係が結ばれた。具体的には、東匈奴は、納質・朝貢を当然ながら義務付けられた。その代わりに、漢は匈奴に安全保障の支援と経済的援助を承諾し

た。そして、東匈奴の単于が漢に朝覲する時、漢は増えつつある賞賜と商売の特権を与えた。実際、前漢の初期と末期の対匈奴経済支出を比べたら、末期に経済支援により匈奴の服順を維持したことは、初期の和親約による賂遺よりも負担が大きくなった、と余英時は指摘する²⁶⁾。結果として、匈奴は統一した後、軍事的奪略よりも漢との客臣関係を維持するほうが安全かつ経済的にも有益な選択肢となった。このように維持を通じて軍事支援と経済援助を得ることについては、バーフィールドが内辺境戦略と定義した²⁷⁾。そして、前漢初期に漢と匈奴が和親約を結んだように、呼韓邪の臣服の後、紀元前 44 年に漢と匈奴は新たな盟を結んだ。したがって、漢と匈奴との関係を判断するにあたって、「自今以來、漢與匈奴合為一家、世世毋得相詐相攻。有窃盜者、相報、行其誅、償其物；有寇、發兵相助。漢與匈奴敢先背約者、受天不祥。令其世世子孫盡如盟」²⁸⁾とあるような盟の内容が重要な基準になる。すなわち、漢と匈奴は互いに侵攻・盗竊せず、もし他の国家の攻撃を受けたら軍事援助を与えることを天にかけて誓う約束だ。こうして、漢と匈奴との間には君臣関係がなく、代わりに、一種の安全保障上の同盟関係が見られる。最後に、紀元前 8 年の漢の土地要求に対して「孝宣・孝元皇帝哀憐父呼韓邪單于、從長城以北匈奴有之」²⁹⁾とある単于の返事に見られるように、前漢初年に長城を境界線に漢と匈奴の国境を定めたことは残っていた。したがって、漢匈関係は、匈奴が形式的に漢に臣服するかたちをとったが、実際には盟にもとづく平等関係であったと考えられる。この平等性は「漢賜單于印、言『璽』不言『章』、又無『漢』字、諸王已下乃有『漢』言『章』。今印去『璽』加『新』、與臣下無別。願得故印」³⁰⁾とあるように、王莽に印章を変えられた単于の言葉にも現れている。要するに、呼韓邪が称臣した後、漢と（東）匈奴は盟にもとづいて平等関係を結んで、初期に和親約によって漢女・賂遺などの義務を漢につける形で匈奴に傾いたのを反転し、末期には納質・朝貢・朝覲・称臣などの義務を匈奴に付加する形で漢により有利なものとなった。

一方、匈奴内戦から西域には天地をくつがえすほどの変化が起こった。西域事務を担当する日逐王の先賢揮が漢に投降したことを機に、漢は天山南路の監護役を務める鄭吉を都護として任命して、天山北路と天山南路との監護の機能を兼備する西域都護を設置した。その後、「大國莎車・于闐之屬、數遣使置質于漢、願請屬都護」³¹⁾とあるように、莎車・于闐をはじめとする天山南路南道の諸国も漢に臣服した。結局、「漢之號令班西域矣、始自張騫而成於鄭吉」³²⁾とあるように、西域都護の設置は西域をめぐる漢と匈奴との争覇に漢の勝利を告げた。

だが、西域都護の設置初期に、「都護督察烏孫、康居諸外国動靜、有變以聞。可安輯、安輯之；可擊、擊之」³³⁾とあるように、烏孫と康居などの大国の動靜を偵察する任務を西域都護に与えたことから見て、烏孫と康居などの大国はまだ漢に臣服していなかった。しかし、匈奴の東西分裂の後、烏孫が匈奴の威力を借りて漢と対抗する可能性は次第になくなった。漢は烏孫を同盟国から外臣国まで変えることに努力し、紀元前 53 年の狂王刺殺から、烏孫の王位に露骨的に干渉を加え、自立していた烏就屠を降服させて、漢公主の子の元貴靡を大昆彌として、烏就屠

を小昆彌として擁立した。しかし、この時、民意の多くが小昆彌に寄せられたように、親漢勢力が漢の動きによって強化され政治の主流に上昇したが、親匈奴勢力が民衆の支持を通じて依然として強固だった。とは言え、「自烏孫以西至安息……及呼韓邪單于朝漢後、咸尊漢矣」³⁴⁾とあるように、天山北路からパミールまでの諸国は匈奴から離れて、漢に寄せて尊意を示したため、漢は匈奴の影響を強く受けた天山北路までに勢力を浸透させた。

2-2 西匈奴滅亡後の漢の帝国化政策

西匈奴は東匈奴と漢との連携を憚って西へ移って、最初に匈奴系の小昆彌に連携を誘ったが、漢の力が確実に浸透していた小昆彌に攻撃され³⁵⁾、紀元前 44 年には烏孫に害されていた康居の誘いに応じてパミールでの康居にまで戦略的に移動した。紀元前 36 年、陳湯は西匈奴の衰弱を利用して、詔を独断で偽って西域諸国の兵を率いて、康居の内応を通じて鄯支を殺し、西匈奴を滅亡させた。そのため、呼韓邪は匈奴を統一したが、漢の力を恐れて紀元前 33 年に朝覲を通じて漢の女を娶ること及び上谷の西から敦煌までの辺塞を取り消すことを請うた。元帝は王昭君を呼韓邪に嫁したが、辺塞の取り消しを拒否した。

成帝即位の紀元前 32 年を境に、漢は匈奴に対して内政不干渉の原則を次第に放棄し、帝国化政策を行なっていった。例えば、漢は紀元前 8 年匈奴に張掖郡付近での匈奴の飛び地を割譲するよう強要したが、匈奴は長城による境界線にもとづいてこの要求を断固として拒絶した。この要求が無理だと分かった成帝は、土地割譲の強要を夏侯藩が独断で行ったことと返事し、匈奴との関係の悪化を回避した。紀元前 1 年、平帝即位の時に漢の朝政が王莽に握られたことから王莽時代が始まった。王莽は匈奴により露骨に干渉し、匈奴の実質的利益を損ねた。漢は紀元 2 年に匈奴に亡命した車師後王の姑句と去胡來王の唐兜を漢に渡すよう要求した。匈奴は長城による境界線があることを理由に漢の要求を拒否したが、漢使は、盟ではなく、匈奴に対する漢の恩をもって匈奴を説いた。その後、「中国人亡入匈奴者、烏孫亡降匈奴者、西域諸国佩中国印綬降匈奴者、烏桓降匈奴者、皆不得受」³⁶⁾とあるように四つの条文を詔った。要するに、匈奴が受け入れることのできない亡命者の対象は、元々の漢人の他に、烏孫、漢に印綬を受けた西域諸国および烏桓にまで拡大した。このような要求は明らかに長城による境界線に逆らうものである。四つの条文の後すぐ、漢は、護烏桓使者を通じて匈奴に皮布税を納めることを禁じる命令を烏桓に下した。

漢は西匈奴の西遷を機に、帝国化政策をとって西域支配を強化していった。紀元前 48 年、車師前国での戊己校尉の設置と車師後国での烏貪訶離の建国を通じて、天山北路と河西との繋がりを確保した。西匈奴を滅ぼした後、漢は大昆彌と小昆彌との紛争を利用し、縦に大・小昆彌を擁立した。烏孫の大臣に優待としての金印紫綬を銅印墨綬に変えたことから見て、漢は烏孫を完全に外臣国にまで格下げした³⁷⁾。烏孫は、元々漢と平等な同盟関係を結んでいた匈奴が衰弱するにつれて、漢に重視される資源と漢に対抗する後ろ盾を失って、漢の外臣国に成り下が

った。したがって、天山北路を勢力圏に取り込んで、天山南路北・南道の支配機構としての西域都護を加えて、「最凡国五十。自譯長・城長・君・監・吏・大祿・百長・千長・都尉・且渠・當戸・將・相至侯・王、皆佩漢印綬、凡三百七十六人」³⁸⁾とあるように、西域諸国に印綬の付与を通じる冊封関係をもって西域に対する覇権を最終に樹立した。

その後、漢は西域諸国に対する善意を次第に失っていき、西域諸国に対して領土保全と内政不干渉を無視して恣意に強要した。紀元 2 年、戊己校尉の徐普は、車師後国を通る新路の開拓に非協力的な車師後王の姑句を拘置した。そして、漢は西域の安定のために軍事力で紛争中の諸国を仲介することをほとんど怠った。紀元 2 年、婁羌の去胡來王の唐兜は、西域都護の但欽に赤水羌に屢々侵略されたことを報告し助けを請うたが、返事と軍事援助を受けることができなかった。

3 新と匈奴との決裂から漢と匈奴との争覇までの対抗状態

成帝以降、漢は西域と匈奴に対して徐々に帝国化政策を施していった。だが、漢に臣服するかたちをとったとはいえ、匈奴と西域諸国（特に大国）は自国が漢の外臣とは認めず、そのため漢による内政・外交への干渉を容認することが不可能であった。したがって、漢は対外政策を変化させなければ、システムの安定を保つことができなくなる。だが、王莽は漢を篡奪し新を建国した後、帝国化政策を再検討せず逆にいっそう強化し、西域と匈奴を新帝国に取り込もうとした。夷狄が王と称することを僭称とみなすため、新は四方へ使者を遣わせて夷狄を王から侯に格下げし、漢から与えられた印綬を変えていった。これをきっかけに、匈奴と西域諸国は地位が低下したため怨恨と叛心がいっそう激化した。

3-1 匈奴と新・漢との対抗

新建国の翌年の紀元 10 年、匈奴は 64 年ぶりの辺境侵入を行なった。王莽は激怒し、軍事的には匈奴の罪を宣告して十二将軍に 30 万の軍で匈奴へ出征させようとし、政治的には呼韓邪の子孫の 15 人を単于として擁立しようとした。その後、新と匈奴は、長年漢に臣服した匈奴の中で王昭君の後代を中心にする親漢勢力が両国関係の緩和に努力していたため、大規模な戦争を行えなかったが、王莽が帝国化政策を堅持するため、短時間の緩和の後すぐに軍事的衝突に入った。この苦境を克服するために、王莽は単于擁立を試み、匈奴の大且渠の奢に自分の庶女の陸遂任を嫁して、軍事力で彼を単于に擁立しようとした。結局、王莽の単于擁立という茶番劇は内戦の中で実施されずに終わった。

玄漢が新を滅ぼして建国した後、匈奴に漢の旧制の璽綬を使者に送らせた。だが、この時、匈奴はその実力では漢よりも優勢なため、「匈奴本與漢為兄弟、匈奴中亂、孝宣皇帝輔立呼韓邪單于、故稱臣以尊漢。今漢亦大亂、為王莽所篡、匈奴亦出兵擊莽、空其辺境、令天下騷動思漢、莽卒以敗而漢復興、亦我力也、當復尊我」³⁹⁾とあるように、漢が匈奴の力を借りて王莽から国

を奪還したことと呼韓邪が漢の力を借りて匈奴を統一したこととの性質が同じなので、前に匈奴が恩義のため漢を尊んだように、今は漢が匈奴を尊ぶべきだと主張した。結局、漢と匈奴との関係は決裂した。その後、匈奴は後漢の建国初期に地方に割拠していた勢力を活かして、漢の地方軍閥に軍事支援を与え、王莽の単于擁立を真似て盧芳を漢帝として擁立し、漢の北辺に侵攻を加えた。盧芳の投降の後、匈奴は、協力者を自国に順服していた烏桓と鮮卑にし、両国を連れてほぼ連年漢に侵入していた。結局、「五郡民庶、家受其辜、至於郡縣損壞、百姓流亡、辺陲蕭條、無復人跡」⁴⁰とあるように、漢の北境は軍事的騒乱によって荒れ果てた。

3-2 新と決裂した西域の匈奴への臣服及び莎車の台頭

紀元10年、車師後国の狐蘭支が匈奴と協力して新を攻撃したことから西域諸国の反抗も始まった。だが、この時、新の西域支配は西域都護が機能していたため完全に喪失しなかった。紀元13年、王莽は烏孫を対匈奴陣営に引き込むため、慣例にしたがわず、大昆彌より強い小昆彌の使者を大昆彌の使者の上に座らせて、大昆彌と小昆彌との君臣関係を反転させた。礼ではなく利にしたがって西域諸国を遇したことは、「夷狄以中国有禮誼、故詘而服従」⁴¹とあるように漢が礼にしたがうために漢に臣服した西域諸国にたいする権威を損ねた。その後、焉耆が叛き西域都護の但欽を殺したことをはじめとして、西域諸国は新と決裂した。匈奴との対立関係が表面的に緩和した新は西域都護の李崇などを西域に遣わして西域支配を回復しようとした。だが、李崇が焉耆の奇襲及び姑墨、尉犁、危須の攻撃を受けて、亀茲を退いて守りに入った。李崇の死によって、西域都護がなくなって、百年をかけて漸く実現した西域に対する支配が烏有に帰した。

その後、「與中国遂絶、並復役屬匈奴。匈奴斂税重刻」⁴²とあるように、匈奴は西域の権力真空を機に、西域諸国を再び勢力圏に組み込んで、以前のように経済的搾取を復活させた。

この時、西域の最強国の莎車は匈奴に服順せず、代わりに、漢に質子として長く暮らした莎車王の延が漢の典章制度を慕って国内に倣って、諸子に漢を世代で奉ずべきだと説教した。だが、匈奴と対抗するために、莎車は漢に支持を求めた。紀元29年、軍閥の河西大將軍の竇融が漢の旧制にしたがって、康を漢莎車建功懷徳王・西域大都尉と冊封した。漢を後ろ盾にした莎車は、康の弟の賢が紀元33年即位して、拘彌と西夜を征服し、天山南路南道の西部を完全に勢力圏に組み込んだ。拡張政策の他、賢は漢と連合して匈奴に対抗する対外戦略を継承し、紀元38年に鄯善とともに漢に朝貢し漢との関係を固めて、紀元41年の朝貢の時に西域都護と冊封することを請うた。光武帝は最初にこの請求を許可し西域都護の印綬を莎車使者に渡したが、「夷狄不可假以大權、又令諸国失望」⁴³とある敦煌太守の裴遵の諫言を受け入れ、西域都護の印綬を漢大將軍の印綬に変えた。天山南、北二道を監護する西域都護の機能からみて、賢が西域都護に冊封してもらうのは莎車が天山南、北二道への拡張するためだ。賢は西域諸国に対して大都護と詐称して、西域諸国に詔書を下して服従させ、西域諸国に単于と尊称された。

権威を立てた莎車は、服順しない国を攻撃しつつ、服順する国に重い税金を課していった。

莎車を牽制するために、鄯善、車師前などの 18 国は紀元 45 年に漢に対し、納質と朝貢をして、漢が西域都護を設置することを請うた。だが、匈奴の攻撃に精一杯に対応していた漢は、質子を返して西域都護の設置を拒否した。これを知った賢は反抗し、鄯善、龜茲、焉塞を撃ち滅ぼして、天山南路の南北二道を勢力圏に組み込んだ。強勢の莎車に対抗するために、鄯善などの天山南路南道の諸国は再び漢に納質して漢に西域都護を設置させることを請うた。だが、光武帝は「今使者大兵未能得出、如諸国力不従心、東西南北自在也」⁴⁴⁾とあるように冷たく拒否し、諸国に自らの活路を探させた。結果として、西域諸国は保護のため匈奴に再び臣服した。

3-3 匈奴の南北分裂

呼都而尸道皋若鞮単于の輿は呼韓邪単于に決められた傍系継承のルールを破って、子の烏達鞮侯に単于位を継承させた。この 77 年間続いてきた継承ルールの破壊は匈奴における各勢力間の矛盾を激化した。紀元 46 年に輿が死んだ後、烏達鞮侯が単于になったがすぐ死んで、烏達鞮侯の弟の蒲奴が即位した。単于にならなかった右翼日逐王の比は秘密裡に匈奴地図を進呈して漢に附そうとした。比の陰謀が暴露された後、蒲奴は比を攻撃しようとしたが、比の軍の数の多いため撤退した。蒲奴の撤兵は比の氣勢を助長した。翌年、比は八部大人に単于として擁立され、大父の呼韓邪単于の故事を継ぐために再び呼韓邪を号した後、漢に使者を遣わせて、北の垣根として匈奴の攻撃から漢を防衛することを請うた。漢はその請求に同意して、比を呼韓邪単于として冊封した。結局、匈奴は再び分裂して、蒲奴単于が北匈奴に、呼韓邪単于が南匈奴になった。

注意すべきは、南匈奴と東匈奴とはその性質が根本的に異なることだ。光武帝時の呼韓邪単于の勢力は、宣帝時の呼韓邪単于より、単に匈奴の南の八つの郡を支配するため、圧倒的に弱い。そのため、稽侯狁が呼韓邪単于になったのは、左地貴人の擁立によってだけ成立し、漢の冊封が必要ではない。代わりに、比は八部大人の擁立した後、漢の冊封による権威を借りて単于になった。このようにみると、比は、呼韓邪の故事を継いでいるというよりも、後漢初年に匈奴に擁立された漢帝の盧芳との性格と似ている。そして、漢は比を呼韓邪単于に冊封した後、一連の政策を通じて南匈奴を渡邊義浩のような「体制内異民族」⁴⁵⁾として統合し、属国的統治と同じように、内政に対しても相対的な自治権を与えたが、軍隊の駐在と使匈奴中郎将・度遼將軍など官僚機構の設置を通じて南匈奴の政務と軍務を統轄しながら、南匈奴の外交権を支配した。

烏桓が匈奴分裂を機に北匈奴に激しい攻撃を行った結果、北匈奴は「匈奴転北徙数千里、漠南地空」⁴⁶⁾とあるように漠南から部衆を北へ転移した。漢は国力が完全に復興せず、防衛から攻撃に転じる能力がなかったため、北匈奴にして離間策と以夷制夷策をとった。南匈奴を対北匈奴の最前線における防壁として働かせた他に、漢は北匈奴と反目した烏桓と鮮卑を引き込み、買収を通じて匈奴に攻撃をさせ、漢の辺塞の防衛の役目を任せさせた。北匈奴は、漢が南匈奴と烏桓・鮮卑と連携して自国を攻撃することを憚って、漢に緩和政策を実施し、紀元 51 年、紀元 52

年と紀元 55 年の再三にわたって朝貢して和親を請うた。光武帝は、北匈奴と和睦すると南匈奴が二心を抱くと考えたため、北匈奴の和親要求を拒否した。このように、漢と北匈奴との間は、和親関係に戻らなかったが、互いに軍事的行動を行わなかったため、共存状態に入った。

だが、注意すべきは、紀元 52 年の北匈奴の朝貢のとき、西域諸国の胡客が匈奴の使者に連れられて漢に来たことである。今回の朝貢は匈奴が西域における影響力の強さを西域諸国の胡客を同行させることで漢に示した。実際に、匈奴は漠南の地から北へ移動した後、南匈奴と烏桓・鮮卑による漠南の防衛線に南下することができなくなって、新たな経済的補充を確保するために、間も無く西域攻略を再開した。北匈奴が西域に攻略を再開する前に、莎車は天山南路南道の西部に対しては將軍を駐在・統治させる直接支配、天山南路南道の東部および天山南路北路の西部に対しては自国の貴人を王として擁立しその国を統治させる間接支配、そしてパミールおよび天山北路の南部分に対しては匈奴における税金と同じ様にその国に貢納物を納めさせる経済上の藩属関係、という三つの統治方法をとって西域に台頭した。経済的搾取を強要し安全保障上の支援を与える匈奴の支配と比べると、莎車の支配は経済的搾取がより重く、他国に対する干渉がより直接かつ横暴であった。その中でも、直接的支配を受けていた天山南路南道西部の諸国は最も甚だしい害を受けた。そのため、反莎車の動きは天山南路南道西部の于闐の反抗から始まった。北匈奴は、天山南路南道の反莎車闘争の成果を奪ったことを通じて、天山南路南道の西部までに影響を及ぼした。莎車の没落と同時に于闐・鄯善、車師、龜茲の台頭により、天山北路と天山南路南、北道には、中心的な地位を得た大国が西域を分割した。だが、これらの大国は、龜茲のように北匈奴に国王を擁立されたり、鄯善と車師のように北匈奴に附したり、于闐のように北匈奴に納質と略遺の協約を結んだりする形で、北匈奴の影響を強く受けていた。結局、北匈奴は、ハブ・アンド・スポークの支配を形成させて、車師を通じて天山北路を、龜茲を通じて天山南路北道を、于闐と鄯善を通じて天山南路南道を、西域を覆う勢力圏に組み込んだ。

3-4 漢と北匈奴との争覇の決着

1 世紀 50 年代には北匈奴は戦略の中心を西域に転じて、西域諸国を勢力圏に組み込もうとした一方、漢は匈奴の攻撃を防衛するために以夷制夷策をとって南匈奴と烏丸・鮮卑に漠南にある北匈奴との緩衝地帯に辺塞の防衛任務を任せて内戦による国内の疲弊を治すために国力回復政策を行っていた。結局、漢と北匈奴は和親をせず共存状態に入った。60 年代に入って間も無く、西域に対する経済的搾取を背景に、北匈奴は早めに国力を回復し、再び漠南に向けていった。北匈奴の侵攻に対して、明帝は、光武帝の対北匈奴政策を変えて、北匈奴の関市再開の請求を機にして、北匈奴と緩和関係を結び、一方、辺郡に増兵し人民を移住させて、辺境の防衛を固めた。70 年代に入って、漢が疲弊からほぼ回復して、武帝の拡張政策を継承した明帝は、再び匈奴と対決し西域を勢力圏に取り戻そうとするために、紀元 73 年に竇固に北匈奴征伐を命じた。北匈奴征伐によって漢の西北辺境と北境の付近にいる北匈奴の軍事的存在を一掃した。烏丸と鮮卑

に賄賂で東北辺境の安全を任せたことに加えて、漢は基本的に北匈奴からの軍事的脅威を完全に払拭した。一方、漢は車師を陥落させて天山北路への進出のための拠点を確保し、二回遣使を通じて天山南路南道の諸国を屈服させたことを通じて、西域都護と戊己校尉の復活に象徴されるように西域攻略で一定の成果を収めた。しかし、匈奴は、対立が緩和されたにもかかわらず漢が宣戦なく開戦したため、すぐに軍事的準備を整えることができず敗戦を喫したが、紀元 75 年に竇固が主力を率いて撤兵したことを機に、車師争奪戦を始めた。匈奴の攻勢の前に、漢は西域都護と戊己校尉をやめて西域攻略の成果を自ら放棄し、西域攻略の失敗を告げた。だが、漢の西域攻略が完全に停止したわけではなく、西域に滞在していた班超は独力で夥しい成果を収め、西域攻略の再開のために準備を整えた。

80 年代に入った後、旱害と蝗害による飢餓と南匈奴、烏丸、鮮卑による襲撃を受けつつあった北匈奴からは、数多くの部族が頻繁に漢に投降した。紀元 88 年、南匈奴は、北匈奴の惨況を機に匈奴を統一するために、称制する竇太后に北匈奴征伐を提案した。竇太后は朝廷の反対を無視し、南匈奴の動議に同意し、竇憲を主帥に任命して、北匈奴征伐を始めた。竇憲の北匈奴征伐は空前の成功を収め、四次の攻勢を通じて壊滅的な打撃を北匈奴に与えた。北单于是北方に亡命して行方不明になり、彼の弟の右谷蠡王の于除鞬は漢に投降して单于として擁立した後、叛いて北庭に戻ったことを理由として、漢において部衆とともに殺された。漠北は北匈奴が退いたため権力が真空状態になった。これを機に、「鮮卑因此転徙拋其地。匈奴餘種留者尚有十餘萬落、皆自號鮮卑、鮮卑由此漸盛」⁴⁷⁾とあるように、鮮卑は漠北に移住してそこに残る匈奴人を吸収して、台頭の軌道に立った。これによって、南匈奴の匈奴統一の可能性が根本から絶えた。こうして、三百年以上続いた匈奴は、西域で活動していた北匈奴の残存勢力と漢に吸収された南匈奴がまだ存在してはいたが、漢と覇権を争うことができる帝国としては完全に滅びた。北匈奴の滅亡が予測されるようになると、西域諸国は次第に北匈奴に叛き、漢に臣服を示していった。漢が伊吾を奪回した後、天山北路の車師はすぐ漢に質子を送って臣服して、漢から印綬を与えられた。翌年、天山南路の亀茲・姑墨・温宿も投降した。これによって、漢は西域都護と戊己校尉官を復活させた。最後に、紀元 94 年、西域都護の班超は亀茲・鄯善などの八国の兵を發してまだ漢に臣服していなかった焉耆と尉犁を屈服させた。こうして、西域諸国は漢と対抗するための援助を北匈奴に求めることができなくなった後、「西域五十餘国悉皆納質内屬焉」⁴⁸⁾とあるように漢に勢力圏に組み込まれた。

4 漢による単極時代

北匈奴の滅亡を境に、東部ユーラシアは、漢が南匈奴の統一を拒否し、漠北の地を占領した鮮卑が部族段階にあって漢と比敵できなかつたため、漢と（北）匈奴による二極構造から漢による単極構造になった。

4-1 漢の西域撤退と西域攻略再開

漢は、班超が西域都護になった12年間に西域における覇権をうまく維持したが、紀元106年に班超を引き継ぐ任尙が赴任した後、西域に対して不干渉政策をやめて西域諸国の反抗を招いた。この時、漢の異民族統治強化の副作用として、異民族の反乱が激しく起こった。その中で、漢が羌人の地を蚕食しつつあった結果として多くの羌の部族が漢に移住し、漢の国内異民族になった。したがって、羌乱は塞外の羌人と塞内の羌人との連携という形で外患から内憂になった。紀元92年から紀元102年までの10年間続いた羌乱を漸く鎮圧した漢は、西域の反抗に対して一時的に反応不能になった。また、鮮卑が漠北の地を占領した後、その一部の部族が蘇拔廆の統領で漢に寇掠をし続けた。内憂外患を蒙った漢は紀元107年に西域都護を放棄し、西域から一時的に撤退した。

漢の西域撤退を知った北匈奴の敗残勢力はすぐ西域に進出し、車師を屈服させたことを通じて天山北路の東部に勢力を振るった。一方、漢の勢力がなくなった後、西域の大国が次第に勢力の拡張を目指すようになり、于闐を中心とする天山南路南道中部、莎車あるいは疏勒を中心とする天山南路南道の西部、そして亀茲を中心とする天山南路北道という三つの勢力圏が現れた。その後、漢は北匈奴と車師後による河西への侵攻を連年受けていた。安全保障のために、敦煌太守の曹宗は紀元119年に伊吾に索班を屯田させて、西域諸国に投降帰順を勧めた。間もなく、車師前と鄯善が臣服に来た。数月後、北匈奴は車師後とともに索班を攻め殺して、車師前王を捕らえた。この時、漢は新たな羌乱を完全に鎮圧できなかったことに加えて、鮮卑の連続する侵攻に苦しんでいたことを背景に、三線作戦を回避するため、北匈奴を進攻しなかった。紀元125年、漢は羌乱の後始末をし、班勇を西域長史にして西域攻略の再開を命じた。班勇は懐柔策で鄯善と亀茲を臣服させて天山南路を勢力圏に取り戻し、その後、北匈奴の敗残勢力を撃退させて天山北路東部の拠点を取り戻し、天山南路諸国を連れて車師後と焉耆を征服し、天山北路の東部と中部をも勢力圏に取り戻した。その後、漢は西域に対する進出の確保のために、紀元131年に伊吾での屯田を復活させて、伊吾司馬を設置した。

4-2 鮮卑の台頭

1世紀50年代に入った後、鮮卑は檀石槐の統領で部族同盟の形で統一を実現した後、南の漢の辺境、北の丁令、東の夫余、西の烏孫を攻撃することを通じて台頭した。だが、この時の鮮卑は匈奴のように帝国を建てたのではなく、依然として部族同盟という国家形態をとった。しかし、蘇拔廆・燕荔陽・其至鞬とは異なって、檀石槐は、幽州の付近の鮮卑だけではなく、「東西部大人皆歸焉」⁴⁹⁾とあるように鮮卑全体に君臨して、さらに、部族同盟を超えて国家組織を建てるために、匈奴に倣って、鮮卑の地を東・中・西三部に分けて各部に自分に属する大人を設置した。だが、鮮卑の部族同盟の結成は各部族が自発的に行った結果なので⁵⁰⁾、檀石槐は鮮卑を一つに統合させたものの、部族同盟を基礎に分割統治を行った⁵¹⁾。すなわち、檀石槐は各

部族に直接に干渉することができず、基本的に三部の大人を通じて命令を下す形で鮮卑を統べた。さらに、三部の大人も同じく各部の部族に直接に干渉することができず、部族のリーダーとしての渠帥を通じて檀石槐による命令を伝えた。だとすると、檀石槐の統一した鮮卑は、対外的に、特に軍事的に集団的行動を行う側面からみると国家になったともいえるが、対内的には依然として部族同盟に他ならず、変わったのはその範囲が鮮卑の一部分から全体にまで及ぶようになったことだ。

問題は、対外的には、軍事行動以外に、檀石槐が鮮卑全体を代表して漢と外交を行うことができるかどうかだ。漢は鮮卑が絶えず漢の北辺を寇掠したことで、厳しい安全保障上の脅威を受けたため、檀石槐を冊封する意味をもつ印綬を使匈奴中郎将の張奐に持たせて鮮卑に派遣した。しかし檀石槐は印綬を受け入れず、和睦を拒否した。その後、檀石槐の国家建設が始まった。二つの事件を関連させて考えると、檀石槐が漢の印綬を拒否したのは、匈奴の単于とは異なって、彼が軍事面以外の利益の分配に対する独占権を持たぬのによることだ⁵²⁾。一旦漢と和睦したら、檀石槐は鮮卑の部族が独自に漢から賞賜を得ることを禁じることができず、さらに、これによって自らの権威が失われていく。代わりに、漢との戦争状態を維持したら、檀石槐は軍事行動に参加する部族を決める権力を持って、それによって権威を強化することができる。檀石槐は和解から自らの権限を知った後、匈奴に倣って国家建設を行った。したがって、外交的に言えば、檀石槐が鮮卑全体を代表することはできないと考えられる。

4-3 東部ユーラシアの解体

漢は西域に覇権を復活させる時、同時に「烏孫・葱嶺已西遂絶」⁵³⁾とあるように、その影響が天山北路の中部（すなわち焉耆）で中断され、天山北路の西部及びパミールには及ばなくなった。その後、烏孫とパミールの西の諸国についての叙述が史籍から消えたことからみて、東部ユーラシアの解体がこの時点から始まったと考えられる。一方、漢は西域に覇権を復活したものの、内憂の羌乱と外患の鮮卑侵攻に軍事力を甚だしく消耗し、西域に有効かつ十分な戦力投入が次第にできなくなっていったため、紀元 132 年以降、「自陽嘉以後、朝威稍損、諸国驕放、転相陵伐」⁵⁴⁾とあるように、西域に対する権威を失った。西域諸国は漢に憚らず互いに戦っていた。その後、漢が西域に対してその覇権を振るうことが有効だと考えられなくなったとは言え、西域長史が存在したため、漢は西域諸国に対して一定の権威を基礎に影響力を発揮していた。その後、漢は紀元 159 年から紀元 169 年まで、東西羌の合流による第四次大規模羌乱を被って、西域へ進出の交通中枢としての涼州に対する管轄が緩くなったため、西域との繋がりが次第に中断されていった。史籍から見て漢と西域との相互作用は稀になって、システムを維持させる程にも達しなかったため、西域と農耕地域を一つのシステムとみなすことができなくなったと考えられる。

一方、鮮卑は、檀石槐の個人的権威で部族同盟を維持したため、紀元 181 年の檀石槐の死の

後、その部族同盟は次第に崩壊し、部族からなる部を政治単位として解体した。その後、遊牧地域を統合する勢力の消失によって、漠南における部（例えば歩度根の部族）は漢と隣り合うため漢との相互作用を続けていたが、漠北における部は漠南の部の遮断によって南下することができなくなって、次第に漢との相互作用が絶えた。結局、遊牧地域の多くは、鮮卑の解体によって、東部ユーラシアにおける他の地域との相互作用が中断し、東部ユーラシアから離脱して独立した地域的システムとして機能したことになると考えられる。

最後に、漢は檀石槐の死の後に鮮卑の侵攻が消えたが、内部問題の激化のために崩壊した。地方には、後漢に入った後、漢の異民族支配の強化のため、異民族の反乱が絶えず起きていた。反乱の戦火は北辺の幽州・并州・涼州、西辺の益州及び南辺の荊州・交州に広がっていた。中央には、外戚、士大夫（党人）、宦官という三つの勢力が次第に形成され、権力をめぐって残酷な闘争を行っていた。腐敗した政府の統治の中で、漢人も残酷な搾取を行い、天災による飢饉をきっかけに多くの蜂起が起こっていた。2世紀80年代に入った後、紀元184年に農民蜂起に始まる黄巾の乱、紀元184年から紀元188年までの羌族と漢人による第五次羌乱、及び紀元187年から紀元189年までの漢人と烏桓による張純の乱などの大規模反乱が発生する中で、漢では中央政府が次第に機能不能になって、軍権を基礎にする地方軍閥が割拠して戦い合っていた。その結果、農耕地域が軍閥による戦争の中で解体した。

結局、東部ユーラシア国際システムは、河西回廊の開通から300年以上をかけて、最初は西域、次は遊牧地域、最後は農耕地域がシステムから離脱する形で、次第に崩壊していった。その後、西域、遊牧地域、農耕地域が地域的システムとして他の地域から相対的に孤立し、自己完結的に動くに到った。

おわりに

両漢時代、東部ユーラシアにおける国際システムは、紀元前121年の河西回廊の開通によって形成され、漢と匈奴が漠南で直接対抗しながら、西域をめぐって覇権を争う相互作用の中で継続し、紀元91年の北匈奴滅亡による構造的変化の結果として、漢匈二極から漢による単極になった。この200年以上の期間に、国家間相互作用が永続的なパターンとして定着することを意味するプロセス形成（Process Formations）が実現した⁵⁵⁾。一方、漢と匈奴は対抗しながら、劣勢の時に互いに懐柔・妥協・譲歩を行って共存状態に入る。一方、漢と匈奴に向けて、西域諸国は、烏孫のように漢と同盟関係を結んで漢の力を借りて匈奴を牽制し自主権を追求したり、楼蘭のように戦略要地のため漢と匈奴に同時に臣服して自らの安全を確保したり、莎車のように漢と匈奴の対抗による西域の権力真空を利用して台頭したりすることを通じて、国家利益を守る。西域諸国の対外政策の多様性が可能になるのは、漢や匈奴が覇権を争うために西域諸国を自国の勢力圏に取り込んで、あるいは、西域諸国との連携・協力のため軍事同盟を形成することに努力したからだ。例えば、漢は西域進出の初期、西域諸国と匈奴を分断させ、同盟分断

戦略 (Wedge Strategy) をとって、烏孫に対して同盟を結んで軍事支援を与えるような報酬と楼蘭・姑師に対して軍事攻撃を加えるような懲罰を同時に利用し⁵⁶⁾、同盟分化、同盟阻止、脱同盟、再同盟などの目的を実現した⁵⁷⁾。烏孫と莎車を代表にする西域諸国は漢の同盟分断戦略を巧みに活かし、匈奴と対抗しながら台頭した。さらに、英国学派が中国の朝貢システムにおける国家間関係が主に二国間だと考えるのとは異なって⁵⁸⁾、特に西域における覇権をめぐるのは、漢と匈奴と西域諸国との間に展開された多国間関係がより重要になる。

しかし、北匈奴滅亡の後、東部ユーラシア国際システムを維持させる重任が漢のみに置かれることとなった。残念ながら、漢は異民族の反乱と派閥闘争による内憂と漠北を占領した鮮卑の侵攻による外患を受け続けた結果として、有効かつ十分な戦力投射ができなくなって、システムの各地域を繋げる能力も喪失していった。一方、匈奴の領土を占領した鮮卑は部族同盟段階に留まって、匈奴のような国家建設を実現しなかったため、システムを一体化させることに貢献せず、一時的な統一の後で部族に分裂し、遊牧地域を一体化させることもできなかった。したがって、東部ユーラシアでは、順次西域、遊牧地域、農耕地域の離脱によって、国際システムが解体した。

<注>

- 1) 何永昌「古代東部ユーラシア国際システムの成立について—境界、国家、相互作用および構造—」『現代社会文化研究』第 71 号, 2020 年, 57-64 頁。
- 2) Hedley Bull and Adam Watson: *The Expansion of International Society*, Clarendon, 1992, p. 1.
- 3) 西嶋定生「東アジア世界の形成」『中国古代国家と東アジア世界』岩波書店, 1997 年 (初出 1983 年); 金子修一『古代東アジア世界史論考—隋唐の国際秩序と東アジア—』八木書店, 2019 年。
- 4) 堀敏一『中国と古代東アジア世界』岩波書院, 1993 年; 堀敏一『東アジア世界の形成—中国と周辺国家』汲古書院, 2006 年。
- 5) 沢田勲『匈奴—古代遊牧国家の興亡』東方書店, 1996 年; 林俊雄『スキタイと匈奴遊牧の文明』講談社, 2007 年; 馬長寿『北狄与匈奴』三聯書店, 1962 年; 陳序經『匈奴史稿』中国人民大学出版社, 2007 年。
- 6) 廣瀬憲雄『古代日本外交史—東部ユーラシアの視点から読み直す』講談社, 2014 年; 菅沼愛語「前漢・新・後漢・隋唐期の中華と周辺諸国双方における敵国内勢力との外交交渉」『九州大学東洋史論集』第 45 卷, 2018 年。
- 7) 胡波「古代東亞関係体系的肇始」『外交評論』第 1 期, 2008 年; 孫力舟「西漢時期東亞国際体系的二極格局分析—基于漢朝与匈奴二大政治行為体的考察」『世界經濟与政治』第 8 期, 2007 年; 苗中泉「従三強並立到帝国秩序—西漢時期東亞国際体系的演變」『世界經濟与政治』第 2 期, 2016 年。
- 8) 『漢書』中華書局, 1964 年, 3765 頁。
- 9) 小林惣八「前漢に於ける匈奴帝国の内部分裂について」『駒沢史学』第 17 号, 1970 年, 55 頁。
- 10) 熊谷滋三「前漢における属国制の形成—『五属国』の問題を中心として—」『史観』第 134 冊, 1996 年, 30-31 頁。
- 11) 『後漢書』中華書局, 1965 年, 1575 頁。
- 12) 林幹『東胡史』内蒙古人民出版社, 2007 年, 34-36 頁。
- 13) 『漢書』, 3771 頁。
- 14) 『漢書』, 3876 頁。
- 15) 『漢書』, 2873 頁。
- 16) 『漢書』, 3780 頁。
- 17) 『漢書』, 3781 頁。
- 18) S. K. Psarras: "Han and Xiongnu: A reexamination of cultural and political relations (II)," *Monumenta Serica*,

- 52(1), 2004, p. 38.
- 19) 『漢書』, 3787 頁。
 - 20) 『漢書』, 3923 頁。
 - 21) 王明珂『遊牧者的抉抉：面對漢帝國的北亞遊牧部族』北京師範大學出版社，2008 年，150-153 頁。
 - 22) 巴菲爾德著、袁劍訳『危險的邊疆：遊牧帝國與中國』江蘇人民出版社，2011 年，51-52 頁。
 - 23) 烏恩岳斯圖『北方草原考古學文化比較研究－青銅時代至早期匈奴時期』科學出版社，2008 年，346-350 頁。
 - 24) 『漢書』, 3282-3283 頁。
 - 25) 王慶憲「降漢以後的呼韓邪單于不是西漢的『外臣』而是西漢中央王朝的臣」『中央民族大學學報（哲學社會科學版）』第 6 期，2010 年。
 - 26) 余英時著，鄒文玲訳『漢代貿易與擴張－漢胡經濟關係結構研究』上海古籍出版社，2005 年，47-50 頁。
 - 27) 巴菲爾德『危險的邊疆：遊牧帝國與中國』, 79-85 頁。
 - 28) 『漢書』, 3801 頁。
 - 29) 『漢書』, 3810 頁。
 - 30) 『漢書』, 3821 頁。
 - 31) 『漢書』, 3930 頁。
 - 32) 『漢書』, 3006 頁。
 - 33) 『漢書』, 3874 頁。
 - 34) 『漢書』, 3896 頁。
 - 35) 大河內隆「前漢の西域進出と烏孫の動向－漢の烏孫支配に関連して」『史叢』第 26 号，1980 年，36-37 頁。
 - 36) 『漢書』, 3819 頁。
 - 37) 栗原朋信「文獻にあらわれたる秦漢璽印の研究」『秦漢史の研究』吉川弘文館，1960 年，185-186 頁。
 - 38) 『漢書』, 3926 頁。
 - 39) 『漢書』, 3829 頁。
 - 40) 『後漢書』, 2982 頁。
 - 41) 『漢書』, 4133 頁。
 - 42) 『後漢書』, 2909 頁。
 - 43) 『後漢書』, 2924 頁。
 - 44) 『後漢書』, 2924 頁。
 - 45) 渡邊義浩「後漢の匈奴・烏桓政策と袁紹」『早稲田大學総合人文科学研究センター研究誌』第 3 号、2015 年，530-533 頁。
 - 46) 『後漢書』, 2982 頁。
 - 47) 『後漢書』, 2986 頁。
 - 48) 『後漢書』, 1582 頁。
 - 49) 『後漢書』, 2989 頁。
 - 50) 巴菲爾德『危險的邊疆：遊牧帝國與中國』, 109 頁。
 - 51) 王明珂『遊牧者的抉抉：面對漢帝國的北亞遊牧部族』, 216-219 頁。
 - 52) 巴菲爾德『危險的邊疆：遊牧帝國與中國』, 111 頁。
 - 53) 『後漢書』, 2912 頁。
 - 54) 『後漢書』, 2912 頁。
 - 55) Buzan and Little: *International Systems in World History: Remaking the Study of International Relations*, Oxford University Press, 2000, pp. 79.
 - 56) Izumikawa Yasuhiro: "To coerce or reward? Theorizing wedge strategies in alliance politics," *Security Studies*, 22(3), 2013, pp. 498-531.
 - 57) T. W. Crawford: "Preventing enemy coalitions: How wedge strategies shape power politics," *International Security*, 35(4), 2011, pp.155-189.
 - 58) Zhang Yongjiny and Barry Buzan: "The Tributary System as International Society in Theory and Practice," *The Chinese Journal of International Politics*, Vol. 5, 2012, p. 19.

主指導教員（真水康樹教授）、副指導教員（神田豐隆准教授・稻吉晃准教授）